

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

4. 交通問題に関する研究——昭和44年度後期より将来の研究として交通問題をとりあげ、多数の参加者があり、資料の蒐集・整理（主として永田忠夫、植村勝彦があたった）を始めた。その後、研究の焦点を「歩行者交通事故」に合わせ、地域特性要因の分析・検討を行なっているが、遅れている。

(1)織田揮準外：運転態度に関する研究 研究報告(I)

1970年2月（原稿は統計研究室保管、数部の複写は調査協力機関へ寄贈）

(2)織田揮準、水野欽司：自動車の運転態度について(1) 東海心理学会第20回大会（1971年5月）

(3)水野欽司、織田揮準：同上 (2)同上

(1971年11月22日)

## 最近の研究経過とその方向づけ 久世敏雄

昨年10月着任以来、約1年を経過したので、以下主としてこの間の研究状況を報告し、あわせてその方向づけを試みたい。

1. 社会化に関する研究——子どもが社会化されていく過程、たとえば、依存性、自主性、攻撃性、達成行動、道徳性、性役割などの社会的諸行動が、いかに獲得、学習されていくか、その過程を明らかにしたい。さらに、それらの諸行動が獲得されていく過程において働くであろう諸機制、たとえば、同一化、模倣、観察学習あるいは社会的力等について検討し、子どもの社会的行動の発達、いわゆる社会的学習理論などの諸観点から、どの程度まで説明しうるか検討を加えたい。

子どもの社会化は、ごく一般には家庭で行なわれ、さらに、最初の家族との出会いは、母親であろう。この観点からすれば、乳幼児期の母—子関係の重要性が指摘できる。さらに、子どもが成長するにしたがって、児童期・青年期の親子関係が注目される。過去において、われわれは、青年—両親関係を、心理的離乳といった観点から把握したのであるが、これらの成果もまた、この枠組に加えることができよう。

この子どもの社会化過程を明らかにするにさいして、われわれは、まず、その現状を把握することが必要である。さいわい、われわれは、（丸井教授とともに）名古屋市青少年問題協議会・名古屋市教育委員会による児童の心身発達の追跡研究の機会に恵まれ、本年度から「児童の社会化に関する縦断的研究」を名古屋市在住の児童若干名を対象に、6年間追跡実施する予定である。

また、最近、この方面の研究がかなりみられる現状から判断して、これらの文献の総括が必要であろう。これは、今後の課題となるが、この期間に出版されたものにつきのものがある。「自主性と発達」<sup>(1)</sup>「児童期の親—子関係」<sup>(2)</sup>なお、これらは、いずれも宮城教育大学在職中に執筆したものである。

2. 青年期に関する研究——青年心理の研究は、私にと

って、その問題意識においても、方法においても、さらにその対象とする被験者においても、さまざまな意味で検討すべき段階にいたっている。私にとって新しい意味をもつ青年心理学が、科学的に、いかに体系化されるかは、将来の課題であるが、われわれは、青年心理研究における、いわば、その立場とでもいう若干の見解を、かつてこの紀要5巻で明らかにした。これらの立場をより明確にする意味において、東ドイツの青年心理研究は、その支えとなろう。また、その方法の問題に関しても、若干検討したことがあるが、十分論じつくしていない。これらも今後の課題となっている。対象とする被験者に関しては、「青年の大学進学<sup>(3)</sup>の意図と目的—その現代的特質—」について検討する機会が与えられ、被験者としての大学生の意味づけが、かなり検討された。これらは、すべて青年心理学における諸問題として提起すべき性格のものである。

つぎに、青年期の自我ないし自己意識の発達にかかわる問題として、われわれは、（蔭山英順氏とともに）青年の自己解放性に関する検討を行なっており、目下、データの整理中である。その成果は、他日報告する予定であるが、これは、統教授を中心とする「いわゆる過疎地域の家族関係」の分担研究でもある。

また、最近、青年の人生観形成がどのようになされているかの実態を、日本の研究資料をもとに検討した。この青年の「人生観の形成」は、依田新編「青年心理学」として出版される予定である。

3. その他——上記以外のいわゆる共同研究として、つぎの諸研究に参加している。

1) 統教授を中心とする総合研究「過疎形態と家族関係に関する比較研究」

2) 広島大学久保教授を中心とする総合研究「大学生の適応異常に関する研究」（丸井教授、村上助教授らとともに）

3) 東海地区・青年心理研究会による研究「青年の家

庭における適応」(大西教授らとともに)

このうち、2)および3)の研究主題は、上述の2.青年期に関する研究に包括することが可能である。

最後に、依田教授を会長とする「青年心理学研究会」(第2回)が、昭和45年12月6日に、名古屋大学教育学部で開催されたことを付記する。(1971年11月22日)

(1) 塩田芳久編：自主性の基礎理論 明治図書 1970

.10

(2) 大西誠一郎編著：親子関係の心理 金子書房 1971.1

(3) 宮川知彰司会：シンポジウム“高等教育における青年” 日本教育心理学会第13回総会 神戸大学 1971.10

(1971年11月22日)

## 研究の方向づけと経過

大橋正夫

私の研究の最終的な目標が対人関係の心理学の体系を樹立することにあること、そして現在そのためのアプローチとして三つの方向をとっていることは、前報に記したとおりである。このうちの第一、対人関係の心理学的構造の問題については、考究は特記するほどの前進をみせていないので省略することにし、他の二点について研究のその後の経過を記すことにする。

1. 印象形成過程の研究——この問題については、私は以前から関心を持ち、少しずつ研究をしてきているが、それはいずれも個人研究としてであった。しかし、本年度にはいってから、私のほかに5名の方の参加を得て研究チームが構成された。そして、私個人の力では及ばないようなスケールの研究ができるような体制が次第にできあがりつつある。このチームは、本年度当初の討議において、二つの方向から印象形成の問題にアプローチすることが決定された。

その第一は、パーソナリティの印象形成における、与えられた言語的情報の統合過程に関する研究である。すなわち、数個の特性語を架空の人物に帰着させることによって形成されるパーソナリティの印象の評価的次元上の評定値が、特性語のそれからどのように予測されるか、という問題である。これについての現在までの成果は本巻の他のところに記載されている。これは、研究のいわば序報にあたるものであり、今後いっそうこれを発展させていく予定である。なおこの概要は、9月におこなわれた日本グループ・ダイナミクス学会第17回大会

において発表された。

チームの研究課題の第二は、顔写真を手がかりとした、未知の人物についての印象形式過程の研究である。これは、当初は第一の課題と並行的に進行させる予定であったが、第一の方に精力の集中を余儀なくさせられたため、ほとんど進行していない。現在計画を検討中であるが、同一人物のカラー写真と白黒写真による印象のちがいをまず検討することになろう。

2. 構造モデルと線型モデルの比較検討——この研究は昨年度後半から私の個人研究として進行中である。これも広義の印象形成の問題と考えることができよう。すなわち、数人からなるグループに対する評価(それに参加したかしたくないか)が、構成メンバーに対する評価(行動を共にしたいかしたくないか)からどのように予測されるか、という問題からはいっていく。その予測のためのモデルとしては、パーソナリティ印象の場合の予測のためにたてられた平均モデルをはじめとする線型モデルが適用できよう。しかし、要素間の関係を見逃すかかるとモザイクなモデルではすべてをおおいつくすことはできない。やはり構造的な観点がそこに必要になってくる。少くともこの両者の構想を相互補完的に援用することによって、いずれか単一の観点よりする予測よりもより精度の高い予測が可能となることを明らかにした。近日中に論文として発表する予定である。

(1971年11月22日)

## 研究経過報告

続 有 恒

昨年と同様、「紀要」17巻の〆切から同18巻の〆切までの1年間の研究経過について、簡単に述べる。

1. 「いわゆる過疎地域」の家族関係の研究では、7月

中旬に熊本県球磨郡水上村へ出かけ、昨年同様40数ケースの面接資料を採集したほか、中学生および青年団の人たちと集団面接による資料採集をした。8月上旬には、